

起点・目標テキスト対応の方法

齊藤美野

立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科

Abstract

In order to consider ways to make correspondences between Source Texts (ST) and Target Texts (TT), this paper explores two different translations of the Bible into German. One of them is Martin Luther's work (the Old and New Testaments) published in the early 16th century, and the other is by Franz Rosenzweig and Martin Buber (the Old Testament or the Hebrew Bible) translated around the mid 20th century. Correspondences could be understood differently by each translator as the translators this paper focuses on found different correspondences to be respected. Among the three translators, Rosenzweig's philosophical thought on translation is discussed. A famous translation theory by Friedrich Schleiermacher is introduced, and according to his theory different ways by which the two translations produced are analyzed. Through the discussion of this paper, some of the meanings of correspondences will be explained.

1. はじめに

翻訳を行なう際の原作、すなわち起点テキスト(Source Text, 以下 STと略記)と翻訳作品、つまり目標テキスト(Target Text, 以下 TTと略記)の対応(correspondences)関係は何に依拠し見出されるか。本稿は、聖書のドイツ語翻訳を行なった二組の翻訳者の考えをもとにその一つの捉え方を提示する。16世紀始めのマルティン・ルター(Martin Luther)、そして20世紀前半にフランツ・ローゼンツヴァイク(Franz Rosenzweig)とマルティン・ブーバー(Martin Buber)が共に行なった聖書のドイツ語への訳出法の比較を通して、二組の翻訳者が ST に対しどのような態度をとり、また両訳が ST とどのように対応するものか見る。そして最後に、ローゼンツヴァイクの翻訳観と訳出法との関係を考える。

ルターの訳は、当時のドイツの一般民衆がわかる言葉に訳出したものであり、それまで一部の知識人のためのものであった聖書を広く読まれるものにした。一方のローゼンツヴァイクとブーバーによる訳は、ST の要素を TT に持ち込んだ訳であり、TT 読者の言語であるドイツ語の規範に収まらないものであった。両者の訳出法の違いを、シュライエルマッハーの翻訳論を参照しつつ考察する。

2. ルター訳

ローゼンツヴァイクとブーバー訳に先行するドイツ語への聖書翻訳に、ルターによるものがある。

ルター訳の聖書は、1522 年初版の新約聖書のドイツ語訳と、1534 年に完成した旧約聖書のドイツ語訳だ(新約はギリシャ語から、旧約はヘブライ語と一部アラム語からの翻訳)。ルターは、それ以前の聖書翻訳の伝統とは異なる方法、つまり当時の規範からはずれた訳出法をとった(Munday, 2001: 22-23)。神の言葉である原典(ST)と TT の一つひとつの単語が対応する逐語訳を行なわなかったのだ¹。自身の翻訳について語っている"On Translating: An Open Letter" (1503/ 1960)という文書から、ルターがどのような翻訳を目指したかについてみよう。この文書は、ルターが自身の翻訳に対する批判的な質問に答える公開状であり、質問とは一対一対応(word for word)の翻訳をしていないルターにその理由を尋ねるものなどだ。この公開状を読むと、ルターが逐語訳を避けていたこと、そして意識を行うことを厭わなかったことがわかる。例えば、"I have constantly tried, in translating, to produce a pure and clear German..." (ibid.: 188)という一節は、純粹(pure)、そして明瞭(clear)なドイツ語へと翻訳しようとしたと述べていることから、ラテン語やギリシャ語に影響を受けていない、明瞭な訳を行うことを目指したことがわかる。

周知の通り改革者であるルターは、ドイツの知識人のためではなく一般の人びとのために訳し、民衆が聖書を読めるようにした。ラテン語やギリシャ語を知らないドイツ語話者がわかるように、民衆が日常用いている言葉へ訳すという狙いがあったのだ。"...we must inquire about this of the mother in the home, the children on the street, the common man in the marketplace. We must be guided by their language, the way they speak, and do our translating accordingly. That way they will understand it and recognize that we are speaking German to them" (ibid.: 189). この引用箇所からはっきりと、一般市民にわかるような日常の言葉を用いた TT を作ろうという考えを持っていたことがわかる。

ルター訳は、ドイツの一般市民の話す言語へ強い影響を与え、規範的言語となった。現代標準ドイツ語へ、形式的・規範的面から影響を与えたのだ。また、ルターの翻訳のおかげで、この時からドイツの一般市民が話す言語は、明瞭でしっかりしたものになったといわれている。このように改革者であるルターの訳は、ドイツにおいて聖書の伝統となるものであったが、その伝統を前にローゼンツヴァイクとブーバーはどのような翻訳を行ったのだろうか。

3. ローゼンツヴァイクとブーバー訳

本稿が取り上げるもう一つの翻訳、ローゼンツヴァイクとブーバー共訳のヘブライ語聖書(旧約聖書)について述べる。これはフリードマン(2000)によると、1925 年からローゼンツヴァイクが 1929 年に他界するまでブーバーとの共同作業により行なった訳である。ローゼンツヴァイクの死後ブーバーが作業を続け 1961 年に完成し、翌 1962 年に出版された(ibid.)。この二名の翻訳者のうち本稿においては、ローゼンツヴァイクに、またその翻訳観に焦点を合わせる。Gordon(2003)によると、

¹ ルターは逐語訳を全く行なわなかったというわけではなく、“Defense of the Translation of the Psalms” (1531/ 1960) という自身の翻訳についての文章の中で、逐語的に訳す場合もあったと述べていることを記しておく。“... we have at times also translated quite literally—even though we could have rendered the meaning more clearly another way—because everything turns on these very words” (ibid.: 216).

ルター訳についてローゼンツヴァイクは、批判的な見方をしていたようだ。ルター訳は、聖書の訳し方の伝統となっていたが、古く、時代遅れであり、そして忠実さに欠けるというのがローゼンツヴァイクの考えであった。そこで、そのような古いルター訳を一新させることが必要だと考えた。

ローゼンツヴァイクとブーバーの翻訳は、古さと新しさの変わった混合が見られるものであった。ドイツの聖書の規範として存在していたルター訳と異なり、"un-German transformations" (ibid.: 239)と言われるような、非常に馴染みのない聖書となった。ローゼンツヴァイクたちは、起源に立ち戻るため、ルター訳の馴染みあるフレーズを馴染みのない言葉に変えた。すなわち、懐古 (archaic) のために、伝統を変更、つまり新しく (modernize) したのだ。Gordon (ibid.: 241) はこれを、"an aesthetic of alienation" 「異化の美学」としている。このような方法で、聖書を新たに活気づかせ、若い読者へ訴えかけることは、ルター訳にはできないことであった。

本稿は、具体的な翻訳の事例の検証を行なわないが、1点だけローゼンツヴァイクとブーバーがどのような訳出をしていたのか、Gordon (ibid.) より例を示す。ローゼンツヴァイクたちは、ヘブライ語の固有名詞の音を保持しようとした。ルター訳では、"Eva" と訳されていた人名を、ローゼンツヴァイク、ブーバー訳では "Chawa" という綴りを用いて訳出している (ibid.: 245)。このような字訳あるいは音訳 (transliterate) した新しい名前は、文献学的忠実性 (philological fidelity) を持っていたと考えられる (ibid.: 247)。ローゼンツヴァイクたちの翻訳は、原典の雰囲気をつかんだものであり、変わった綴りは、ヘブライ語聖書の精神を捕らえることができ、そして、聖書を一新する力を持つものであった。ちなみに『クラウン独和辞典』(2002) を引くと、"Eva" は掲載されているが、"Chawa" という項目はない。

次に、ローゼンツヴァイクたちの翻訳が持つ "otherness" (Gordon, 2003: 248) について考える。なお、otherness を本稿では「異質さ」という意味と捉える。先に述べたようにルター訳は、ドイツ語及びドイツ文化・歴史に馴染むような自然な訳であり、そしてそれが聖書翻訳の規範となっていた。それに対する反動であるローゼンツヴァイクとブーバーによる訳は、"a principle of difference" (ibid.: 250)、「差異の原理」に基づくものとする。ローゼンツヴァイクは、馴染みのない訳でこそ、原典の長命と力とを保持できると、そしてドイツ語の規範に対する違反がおこるとしても、異質さを前面に出すような訳が良いと考えた。そこで、ルター訳にはない(そこでは消されていた) 異質さを持たせた訳を創出したのだ。

ローゼンツヴァイクとブーバーの翻訳は、2点において異質さがある翻訳だったという (ibid.: 238-257)。それは逆説的な2種類の異質さであった。その一つ目は、ルター訳に対抗する指向から生じたもので、伝統(ルター訳のこと)からの乖離という意味での異質さである。これは、ドイツの文化・言語に馴染むように訳されたルター訳とは異なり、原典に忠実に訳そうとしたということから、原典に立ち戻る、復旧する (restore) あるいは懐古的な訳であったということだ。もう1点の異質さは、当時のドイツ語に馴染まない言語使用をしたという点での異質さである。つまり、現代性 (modernity) との差異があったということになる。ST で使用されているヘブライ語の要素をドイツ語へ持ち込んだので、当時のドイツでの言語使用とは異なる言語使用法が TT において見られたということだ。なお、先に逆説的としたのは、懐古主義、すなわち過去へ戻るものでありながら、新しい言語使用を採用するという歴史にとらわれない翻訳だったということからだ。以上の2点において、ルター訳とは異なる、"un-German (less German)" (ibid.: 249)、ドイツ語らしくない TT となった。

再び逆説的な説明をすると、ローゼンツヴァイク、ブーバー訳は、聖書を復旧するものであったと同時に、現代化する(modernize)ものであった。聖書解釈を新たにしたという意味での現代化(modernization)であり、また原典を再発見したという意味では復旧(restoration)であったのだ。ルター訳ではドイツ化(Germanize)されていたために忠実に訳されていなかった原典の世界を描き出すことで、馴染みある聖書を異質さを感じさせるものにしたということになる。

聖書の言葉に対する忠実性を持ち、原典の形式・内容を大事にしたローゼンツヴァイクらの翻訳は、創造的に翻訳することによる現代化なのではなく、原典を再発見した上での翻訳なのである。彼らはこの意味での忠実さのために、ドイツ語の慣習に反することになってもそれは仕方がないと考えた。何故ならば、オリジナルが自分たちからは遠い言語、遠い文化だからである。ローゼンツヴァイクたちは、原典の世界と当時のドイツとの間の遠い距離と、オリジナルを再現するという目標の間で折り合いをつけていた。ローゼンツヴァイクとブーバーの目標は、原典を回復し、しかもドイツ語で書かれたテキストの作成だったのだ。

4. シュライエルマッハーの論

ここでは、ルター訳とローゼンツヴァイク、ブーバー訳の差異を、両者が ST と TT にどのような対応を作りだしていたかという点から考えてみる。我々の仮説は、両者の翻訳法および TT が異なるものになったのは、ST の要素の何を優先して TT に対応させるかという点において差異があったからだというものだ。翻訳を行なう際に ST のどの要素の保持を優先するかという問題は、歴史的に見ると、意味か形式かという議論と結びつく。これは訳出法でいえば、意識か逐語訳かという問題に繋がる。紀元前1世紀のキケロ(Cicero, 46BCE/ 2002CE)の頃から翻訳法として多く選ばれてきたのは、意識だ。それは ST と TT の意味内容(情報)の対応が優先され、言葉の形(形式)は類似していなくてもよい、あるいは、似ていないほうが読者が理解しやすく、翻訳とわからない読みやすいものになっていてよいという考えに基づく訳出法だ。

18 世紀になるとドイツで、同じく二項対立の翻訳論ではあるが意味と形式という分け方、捉え方とは少々異なる論が登場する。ドイツの神学者、哲学者、そして翻訳者でもあるフリードリヒ・シュライエルマッハー(Friedrich Schleiermacher)は、1813 年の講演において有名な翻訳論を展開する。これは、当時のドイツにおける唯一の体系的・方法論的翻訳研究であった(Berman, 1992: 144)。シュライエルマッハーは、翻訳者は、二つの道をたどることができると、つまり翻訳には二つの方法があるとする。「作家を出来るだけそっとしておいて読者の方を作家に向けて動かす、あるいは読者の方を出来るだけそっとしておいて作家を読者に向けて動かす、このどちらかしかありません」(シュライエルマッハー 1988a: 16)²。一つ目の方法は、翻訳者が原作から得たものと同じ印象を TT 読者に伝えようとするものであり、この方法は読者を「異質な場所」(ibid.: 16)へ連れて行くことになる。これは、原作者が自分で訳したような翻訳であるとも、シュライエルマッハーは説明している。二つ目の翻訳法は、原作者を目標言語の世界へ引き入れ、目標言語使用者に変貌させるも

² シュライエルマッハーの二つの翻訳法を Munday(2001: 28)は、“alienating”(読者を作家のほうへ動かす方法)と“naturalizing”(作家を読者の方へ動かす方法)と呼んでいる。

の。これは、原作者が始めから目標言語使用者として目標言語で書いたような翻訳ということだ。

シュライエルマッハーは、この二つの方法の折衷はなく、二つを同時に行うとしたら信頼に値しない翻訳にしかならないとしている。そして、どちらを良い訳出法としたかという、読者を作家に向けて動かす翻訳のほうだ。原作者がもともと目標言語で書いていたかのように訳すという狙いは、達成できないばかりでなく空疎であるという。思想と表現の関係性を考えればそれは当然であり、もし最初から目標言語で書いていたのなら違う作品となっていたはずという考え方だ。シュライエルマッハーは、母国語において外国語の持つ異質なものが表現され、それが異質に響くことを良しとした。「異国の植物を色々と移植することによって私たちの国土自身も豊かで多産なものとなり、風土もまたより優美で穏やかなものとなってきたのです」(シュライエルマッハー 1988b: 172)。異国の要素をドイツ語へ持ち込むことで、ドイツの言語や文化が発展すると考えていたのだ。試みにシュライエルマッハーの論を上述した逐語訳か意識かという論争と照らし合わせると、読者を作家に向けて動かすには、異国の影響がドイツ語に「移植」できる逐語訳が有効だと考えることができる。一方の意識は、作家を読者に向けて近づける方法のとき使用されると考えられる。つまり、読者が馴染みある言語へとST(作家)の言語を訳出するということだ。

シュライエルマッハーが提唱した二つの翻訳法を、ルター訳とローゼンツヴァイクとブーバーの共訳とにあてはめてみると、まずルター訳は、作家を読者に向けて動かす訳だと捉えることができる。TT 読者が普段使用する言語に訳出された聖書を読めるということは、原典が TT 読者に近づけられたということだ。一方、ローゼンツヴァイクらの訳は、「差異の原理」に基づくものであり、それは ST に近づけられたため規範的ドイツ語と異なっている。すなわち、TT 読者のほうが動かされている訳出法である。ローゼンツヴァイクらは、こちらのほうが読者のためになる、おもしろい訳出法だと考え、この方法により異質を持った TT を創出した。まとめると、ルターは、ST の意味が保持されていることが大事であり、逐語訳により形式を保持することは、TT 読者の理解を妨げることになるので避けるべきことだと考えた。そして、ローゼンツヴァイクとブーバーは、翻訳において重要なことは、TT 読者が ST を直接感じられるようなものをつくり出すことであり、そのためには、ST の持つ形式という要素は、保持されるべきだとした。

5. ローゼンツヴァイクの翻訳観

最後に、ローゼンツヴァイクの翻訳観から、何故先行するルター訳と異なる訳出法をとったかについて再び考える。ローゼンツヴァイクが考える翻訳の役割、さらに翻訳により言語が変化していくということや、諸言語間の関係についての考えを見ていく。ローゼンツヴァイクは、翻訳者とは「他の言語で語られた言葉をもう一つの言語のうちで再活性化させる」ものであると考えたという(柿木 2006: 168)。STを文字通り、逐語的に訳すことによって、STはTTの中に現れ、また響く。そのときSTは、原初の状態のままではなく、変化している。例えば目標言語がドイツ語である場合、起点言語が翻訳を通しドイツ語化されたのではなく、ドイツ語が起点言語・テキストの影響により異なるものになっていると捉えることになる。他言語がドイツ語内に響くことにより、ドイツ語が変化していくのだ。「他の言語の異質さにこそ応える翻訳のありようは、〔中略〕言語を固定された体系として実体化するのではなく、むしろ異他なる言語と接するなかで〔中略〕異質な言語に答える形でみず

からの言語を新たに形成してゆく可能性を示すものと言えよう」(ibid.: 170)。

ローゼンツヴァイクが考える翻訳の課題として『『唯一』の『真』の言語」(ibid.: 174)の復元が挙げられる³。諸言語の対立を乗り越えること、そして異なる言語を話す人びとが理解し合うことを可能にするものとなることを翻訳の課題とした(ibid.)。その課題は、翻訳を通し、個々の言語の「自己革新」(ibid.: 171)が引き起こされることにより達成可能だと考えたという。つまり自己革新により、ある言語は、ほかの言語に対し開かれることができるということだ。ローゼンツヴァイクは、母語を確固とした変わることのないものだと絶対化せず、翻訳による母語(言語)の自己革新を通し諸言語の本質的統一、すなわち「全人間的理解」(ibid.: 177)を目指した。このような翻訳観を持っていたローゼンツヴァイクは、ドイツ語の中にヘブライ語を響かせ、ドイツ語を革新するような翻訳法を選んだと考えられる。

6. おわりに

STとTTの対応の方法と題し、対応させる要素の差異をドイツ語への聖書翻訳という分野における二つの訳、ルター訳、そしてローゼンツヴァイクとブーバー訳に見てきた。ドイツの一般民衆にわかりやすいように訳したルターと比較すると、ローゼンツヴァイクとブーバーがルター訳に対抗するような、規範からはずれる、読者にとって馴染みのない聖書を作ったことがわかる。シュライエルマッハーが、TT 読者にとって異質な訳がよいとしているように、ローゼンツヴァイクとブーバーも翻訳が読者にとって異質なものであるようにした。さらに、翻訳が ST をドイツ語の中で回復させるものとなるよう努め、他言語との接触によりドイツ語が変化するよう促進したことから、母語を含む言語を絶対化しない姿勢が伺える。ST を尊重したローゼンツヴァイクらの翻訳は、ヘブライ語と接するドイツ語を新たに形成する狙いもあったと考えられる。

STとTTの対応をどのような点に見出すかという点では、ルター訳においては、テキストの内容であり、STの形式の保持というのはそれと比較し重要ではなかった。シュライエルマッハーのいう「作家を読者に近づける訳」である、起点言語に影響を受けていない TT をつくり出すことに専心したと考えられる。他方ローゼンツヴァイク、ブーバー訳では ST の響きを TT で再現すること、STとTTが形式的に対応していることとルター訳とは異なる点が意識されていたことが推察できた。シュライエルマッハーの論でいえば、ローゼンツヴァイクらの訳は「読者を作家に近づける訳」となる。本稿は、シュライエルマッハーの論を参照しながら、二つのドイツ語聖書翻訳について考察した。ある翻訳作品における ST と TT の対応法、換言すれば両者の関係についての研究は、本論の観点以外からも、また聖書以外の様々な題材に対して行なうことができる。続きはまた別の稿にて考察したい。

³ この概念には、ローゼンツヴァイクと同じユダヤ系思想家であるヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin)が、「翻訳者の使命」(1996/1923)の中で述べている「純粹言語」との類似が見られる。ベンヤミンは、翻訳を通し諸言語を純粹言語へ到達させることが翻訳者の使命であるとし、その純粹言語とは諸言語が異なる方法で志向する一つの「真なる言語」(ibid.: 402)だとした。ある一つの言語の再生を翻訳の到達点として挙げる点が、ローゼンツヴァイクとベンヤミンに共通している。両者の思想の類似性に関して詳細は、柿木(2006)を参照されたい。

(本稿は、第8回日本通訳学会年次大会での研究発表に加筆修整を施し構成した。発表の際にいただいた貴重なご意見・ご助言に感謝申し上げ、今回反映しきれなかった点は、今後の研究に活かすよう努めたい。)

著者紹介： 齊藤美野 (SAITO, Mino) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科後期課程在籍。文学作品を題材とした翻訳研究に哲学・思想面から取り組む。

連絡先: minosaito@jcom.home.ne.jp

参考文献

- Berman, A. (1992). *The experience of the foreign: Culture and translation in romantic Germany*. (S. Heyvaert, Trans.). Albany: State University of New York Press. (Original work published 1984)
- Cicero, M. T. (2002). The best kind of orator. (H. M. Hubbell, Trans.). In D. Robinson (Ed.). *Western translation theory: From Herodotus to Nietzsche* (2nd ed.). Manchester: St. Jerome. (Original work published 46BCE)
- Gordon, P. E. (2003). *Rosenzweig and Heidegger: Between Judaism and German philosophy*. Berkeley: University of California Press.
- Luther, M. (1960a). Defense of the translation of the Psalms (E. T. Bachmann, Trans). In E. T. Bachmann (Ed.). *Luther's works volume 35: Word and sacrament*. Philadelphia: Fortress Press. (Original work published 1531)
- Luther, M. (1960b). On translating: An open letter (C. M. Jacobs, Trans). In E. T. Bachmann (Ed.). *Luther's works volume 35: Word and sacrament*. Philadelphia: Fortress Press. (Original work published 1530)
- Munday, J. (2001). *Introducing translation studies*. London: Routledge.
- ベンヤミン, W. (1996). 「翻訳者の使命」浅井健二郎(編)(内村博信・訳)『ベンヤミン・コレクション2』筑摩書房. [原著: Benjamin, W. (1923/1972). *Die Aufgabe des Übersetzers*. In T. Rexroth (Ed.). *Walter Benjamin Gesammelte Schriften IV-I*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.] 387-411.
- フリードマン, M. (2000). 『評伝マルティンブーバー 下』(黒沼凱夫・河合一充・訳)ミルトス. [原著: Friedman, M. (1991). *Encounter on the narrow ridge: A life of Martin Buber*. Minnesota: Paragon House.]
- 濱川祥枝(2002). 『クラウン独和辞典』[第3版]三省堂.
- 柿木伸之(2006). 『『母語』を越えて翻訳する: ベンヤミンとローゼンツヴァイクの翻訳概念のポテンシャル』『哲學』第49号: 165-179.

シュライエルマッハー, F. (1987). 「翻訳のさまざまな方法について(一):王立学術アカデミー講演(一八一三年六月二四日)」(三ツ木道夫・訳)『同志社外国文学研究』第 77 号:136-143.

シュライエルマッハー, F. (1988a). 「翻訳のさまざまな方法について(二):王立学術アカデミー講演(一八一三年六月二四日)」(三ツ木道夫・訳)『同志社外国文学研究』第 78 号:16-26.

シュライエルマッハー, F. (1988b). 「翻訳のさまざまな方法について(三):王立学術アカデミー講演(一八一三年六月二四日)」(三ツ木道夫・訳)『同志社外国文学研究』第 79 号:164-175.